

四万十の森の“野鳥”を見続けて = 梶原町松原地区 =

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は、四万十の野鳥を見続ける梶原町松原“民宿野彩（ヤイロ）”の川田早苗さんです。

クマタカ

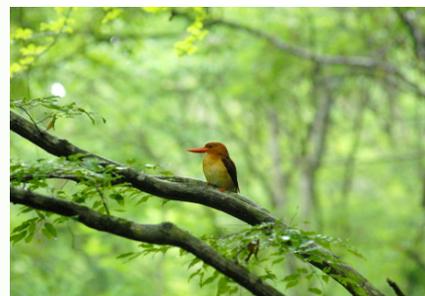
春浅い奥四万十中津川上空を、2羽の大きな黒い鳥が飛んでいく。トビのようにも見えるがそうではないようだ。ゆっくりと大きな弧を描きながら、地上の気配をうかがうかのような飛び方だ。「あれはクマタカです」川田さんが教えてくれる。「トビとは羽の形や飛び方が違います。」この時期、2羽のつがいで飛ぶことが多いとも教えてくれた。何しろ山の上のまだその上、地上からだと黒い点にしか見えない。上空を飛ぶ黒い点が、絶滅危惧に指定されている、あのクマタカとは・・・
四万十の森には、多くの野鳥が生息することに、その時あらためて気が付いた。



クマタカの幼鳥（撮影：川田早苗さん）

アカショウビン

ここは奥四万十中津川から林道を通ってひと山越えた場所、人口300人ほどの静かな山あいの集落梶原町松原だ。ここ松原に、1年半ほど前に誕生した二つの民宿のうちの一つ“野彩（ヤイロ）”に、野鳥の写真を撮り続ける川田早苗さんを訪ねた。川田さんが生まれたのは、同じ梶原町でも町南部の松原とは反対側、北部の山間部だ。「幼い頃から自然の中で育ってきたのでずっと鳥は好きでした。」しかし、鳥を観察するようになったのには、ある“きっかけ”があった。この松原に嫁いでしばらくたった頃、自宅脇にアカショウビンがやってきた。アカショウビンとは野鳥愛好家の中ではスター級の鳥で、なるほどその姿は写真で見ても魅力的だ。その赤い鳥が、川田さんの家の脇にあったスズメバチの古巣に興味を示し巣作りを始めたのだ。しばらく観察をしていたが、ある時を境にぶつり姿を見せなくなった。それと時を同じくして、家の近くにいたカッコウも鳴くことをやめた。なぜだろう？何がいけなかったのだろうか？そう思った川田さんは、そのことを新聞に投稿した。結局理由は明らかにはならなかったが、しばらくして、それを見た人が川田さんを訪ねてきた。その人は野鳥の写真を撮っている方で、それがきっかけとなり、川田さん自身も野鳥の写真を撮り始めたのだ。



アカショウビン（撮影：川田早苗さん）

ヤイロチョウ

川田さんの経営する民宿野彩の近くには、その宿の名前の由来通りに、夏場ヤイロチョウが飛来する。ヤイロチョウは高知県の県鳥で、夏鳥として日本にやってきて繁殖する。日本には100～150羽ほどしかいないらしいが、四万十川流域の森林はその代表的生息地で、日本で一番ヤイロチョウ密度が高いらしい。しかし流域に住む人でも、その生きている姿を見た人は多くはない。川田さんは5年ほど通い詰め、昨年このヤイロチョウのお気に入り写真を撮ることに成功した。（右の写真）「この鳥は警戒心が強く、なかなか良い写真が撮れません。また巣にいるところをのぞきこんだりは厳禁です。だから私は、“今年こそは”と毎年山に通い、5年目でやっと、この写真を撮ることができました。」そうして撮ったこの写真。“森の妖精”と呼ばれるこんなに美しい鳥に森の中で遭遇したら、誰もきっと、夢の中にでもいるかのような気分させられるのではないだろうか。



ヤイロチョウ（撮影：川田早苗さん）

イヌワシ & コノハズク & 川田さんの夢

その川田さんには、叶えたい夢がある。日本ではクマタカやヤイロチョウ同様、絶滅危惧種になってしまったイヌワシ。いつかその鳥をモンゴルまで見に行くという夢だ。「イヌワシは、四国にもかつてはいたようですが、今は日本中に数百羽しかいなくなりました。でも、以前テレビで、モンゴルでのイヌワシを使った鷹狩を見たのですが、それは、それは、壮観で・・・。だから、いつかそのイヌワシをモンゴルまで見に行きたいのです。」「以前はよく鳥を追って日本中を旅しました。鳥を介して、多くの人とも知り合いになりました。でも今は、ほとんどこの四万十で野鳥と接しています。」だから、“この季節になると、必ずここにこの鳥がやってくる”ということを知っている。それ故、毎年毎年、少しずつ森の環境が変わっていくことに心を痛める。野鳥を観察し続けると、環境の変化をイヤでも感じると、川田さんは言う。「最近ね、春分峠のコノハズクが少なくなっているようで、気になっているのよ・・・」まるで隣人のことを心配するかのように語る川田さんの本当の夢は、いつかこの野鳥たちが安心して暮らせる森の環境を、取り戻すことなのかもしれない。

